

2期

二〇二四年度 中学校入学試験問題

国語

- 1 問題用紙は開始のチャイムが鳴ってから開いてください。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 3 受験番号と氏名は解答用紙と問題用紙に記入してください。どちらも集めます。
- 4 。、「」などは一字に数えます。
- 5 試験時間は50分です。

受験番号

--	--	--	--

氏名

--

〔一〕

次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 次の——線の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直して答えなさい。送りがなが必要な場合は、ひらがなで書きなさい。

- 1 ご来光を拜む。
- 2 険しい山に立ち向かう。
- 3 強敵を相手に奮闘した。
- 4 破竹の勢いでつき進む。
- 5 ジシヤクのN極とS極。
- 6 栄養分をオギナウ。
- 7 たんぼぼのワタゲを飛ばす。
- 8 ソシキの中心として活動する。

問二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

スマホの画面をのぞきながら足早に、夜道を家路につく。ふと見上げると、すばらしい輝きの満月が浮いていた。つい先日のことだ。現代社会は、夜空を見つめる機会をすっかり失わせてしまった。

I 今夜ぐらいい。七夕である。

芭蕉は、A から心待ちにしていたらしい。(注1) 文月や六日も常の夜には似ず。『奥の細道』の長い道のりでは、暑さや雨に苦しんだ。旅を見まもる星たちは、対話を重ねる相手でもあったのだろう。

芭蕉が生きた時代とは異なって、新暦のいまの七夕は、天気には恵まれぬものと相場が決まっている。気象庁によれば、2020年までの過去30年で、7日が「晴れ」だったのは東京で23%しかない。織姫と彦星は年1度の再会を無事に果たせるのか。① やきもきして当たり前なのである。

II 今年はいかに。きのう各地では梅雨の晴れ間が広がり、真夏の暑さとなった。一日早かった。きょうからは前線の活動が再び激しくなり、九州などは雨の予報となっている。

万葉集の名もなき歌人も、天を見上げて 銀の粒を恨めしげに眺めたのだろう。そして想像力をふくらませた。(注2) この夕降り来る雨は彦星のはや漕ぐ船の櫂の散りかも。② 銀河をこぎ渡る彦星の舟。そのときに飛び散るしぶきに、雨を例えた。

早く会いたいと、はやる彦星の気持ちは 分からぬではない。③ ただ、しばらく大雨はこりごりの地域もある。これ以上の災害が起ころぬよう、櫂をこぐスピードを少々 B いただけると、ありがたい。

(朝日新聞「天声人語」による)

(注1) 文月：芭蕉の時代の暦で七月のこと。

(注2) 櫂：船をこぐための道具。

1 I ・ II に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア また イ ちょうど ウ どうせ エ さて オ せめて カ いわゆる

2 A に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 前月 イ 前夜 ウ 朝 エ 前年 オ 昼

3 線①「やきもき」とありますが、これと最も近い意味をもつ語を次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア おろおろ イ むしゃくしゃ ウ おどおど エ わくわく オ はらはら

4 線②「銀の粒」とありますが、これは何をたとえていますか。文中から漢字一字でぬき出して答えなさい。

5 線③「分からぬではない」とありますが、これはどのような意味ですか。最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア とてもよく分かる イ 少しは分かる ウ よく分からない エ 全く分からない

6

B

に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 落として イ あげて ウ 引いて エ まいて オ 早めて

7 「七夕」は秋の季語です。次の句の中で秋の季語をふくむものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 雪だるま星のおしやべり(おしやべり)ぺちやくちやと(ぺちやくちや) (松本たかし)
イ たんぽぽや日はいつまでも大空に (中村汀女)(ていじよ)
ウ 名月を取つて(と)くれると泣く子かな (小林一茶)(いっさ)
エ ひつば(と)れる糸(いと)まつすぐや甲虫(かまむし) (高野素十)(すじゅう)
オ じゃんけん(けん)で負けて(まか)て(て)蛭(はたろ)に生まれたの (池田澄子)(すみこ)

〔二〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

注意。、「」などは一字に数えませぬ。

小学六年生の真子は学校の合唱クラブに所属しているが、コンクールでの優勝を目指して厳しい練習を行うクラブの雰囲気違和感を抱いていた。ある日、真子は地域のコーラス団体「半地下合唱団」に参加し、ソプラノ・パートを歌う少年・朔の美しい歌声に圧倒される。

追いかけても追いかけてもとどかない朔くんの声は、やはりとても魅力的だった。

And wherever I climb (わたしがどこへ登って行くとも)

Far away and anywhere (遥か彼方、どこにいたとしても)

You raise me high, beyond the sky (空よりも高く)

Through stormy night, lifting me above (嵐の夜を越え、わたしを高めへ引き上げる)

Venite Spiritu et emitte caelium (精霊よ来たりたまえ、天の御使いを送りたまえ)

Venite Spiritu et emitte caelium (精霊よ来たりたまえ、天の御使いを送りたまえ)

Venite Spiritu Venite Spiritus (精霊よ来たりたまえ、精霊よ来たりたまえ)

Far away, beyond the sky (遥か彼方、空よりも高く)

神様に感謝と祈りをささげる歌なのだ、日本語訳の意味を調べてわかった。^①この歌の背景をもっと知りたいなどお母さんにタブレットを借りて調べていたら、「コンクールの歌のこと調べてるの?」と、かんちがいされた。

コンクールで歌う課題曲も自由曲も、こんな風に、曲にこめられた風景や物語を感じ取ることから、練習を始める。聴いている人に自分の力やテクニクを見せつけるんじゃないなくて、曲にこめられた物語と、そこから受け取った自分の感情をの

せる。

② 日々の練習で育てたハーモニーは、それらをとどけるための風のようなものだ。

力強く、澄んだ風に物語や想いがとけると、ラベンダーみたいな優しい香りがある——小学一年生のわたしが、入学式で味わったのは、そんな瞬間だったのだと思う。

本来、そういうものだったはずなのに。合唱クラブの今の歌声には、香りなんてちつともじんでいない。失敗しないように、先生や穂乃花に怒られないように……そんなのばかりだ。

「やっぱり、もつたいないなって思っちゃう」

歌い終えた朔くに、真っ先にそう伝えた。

「もつたいない？」

「朔くんが合唱クラブにいてくれたらってことじゃなくて、朔くんがこんなにきれいなボーイ・ソプラノを持つてるのに、それを知らない人がいっぱいいるのが、もつたいないって思ってる」

「でもさ、俺のソプラノ、もうすぐ消えるんだよ」

わたしの目を、見すえたまま、朔くんはつぶやく。

「声変わりがきたら消えるの。小四の秋ぐらいからいきなり背がのび始めたし、いつ声変わりがきてもおかしくないんじゃないかな」

男子の声変わりが始まるのって、小学校高学年から中学生にかけてだったけ？ 朔くんは背が高いし、まわりの子より早く

声変わりするかもしれない。

そうなったらきつと、このボーイ・ソプラノは出せなくなる。

「俺は自分の歌声が好きだ。だから、馬鹿にされたらムカつくから学校では歌わない。嫌な思いをしてまで歌いたくないから、合唱クラブにも入らない。真子ちゃんがどう思おうと、ここで楽しく歌えれば、それでいい」

——それに。

③ ぼつりとこぼした朔くんが、のどにそつと手をやる。どこまでも広がる、澄んだソプラノを響かせる自分ののどを、優しくなでた。

「声変わりがきたらなくなるのに、⁽¹⁾むなしいじゃん。大勢の前で自慢げに歌って『きみの声は素晴らしいね』っていろんな人にほめてもらっても、コンクールで金賞をもらっても、すぐに消えちゃうのにな。そうなたらきつと、みんな『もったいない』って言うんだ」

「ちがうよ。わたし、そういうつもりで言ったんじゃない……」

「わかってるよ」

鍵盤をもう一度布でふいて、朔くんはピアノの蓋を閉める。

「自分が一番、声が消えるのを『もったいない』って思ってるんだって、わかってる」

朔くんことは、はじめて会ったときから大人っぽい雰囲気の子だと思っていた。わたしが「ラベンダー色の似合うお姉さん」に憧れたように、朔くんも大人っぽい自分になりたくてそうなったんだと、ほんやり思いこんでいた。

でも、そうじゃなくて。

大事なものがいつか消えてしまう未来をずっとずっと見つめていたから、ほかの子より一歩前を歩いているような大人びた雰囲気、いつの間にか身にまとってしまったのかもしれない。

「魚住のおっちゃんが『夏祭りで歌おう！』って言ったのに反対しなかったのも、消える前に誰かに聴いてほしいなって思ったのかも。どうせ声変わりがきたら消えるんだから〜って軽く話してたくせに、いつの間にか、放したくなくなっちゃったんだよな」

「だから、牛乳飲むのをやめたの？」

優里の家に行ったとき、朔くんは牛乳を飲まなかった。半年前に飲むのをやめたって。

「あんまり意味なかったけどね。^(注1)朔ちゃん、カルシウムを摂らなくても発育いいみたいだから。成長期には勝てなかったね」

あははっと笑った朔くんが時計を確認し、「もう帰らないと。父さんと母さんに怒られる」と立ち上がった。わたしも、テーブル席におきっぱなしだったランドセルと傘を取りに行く。

「それじゃあ、次の練習でね」

^(注2)バーの明かりを消し、出入口口にカギをかけた朔くんが、わたしに手を振って、帰っていく。

外はすっかり夜だったけれど、雨は降ってなかった。⁽³⁾雨上がり独特の蒸し暑さと、ねっとりとした水たまりの香りが、あ

なりにただよっている。

朔くんの家は、路地の先。わたしの家は、商店街のメインストリートを抜けた先。ここで別れるのは、ごく自然のことだ。

朔くんの背中が、小さくなっていく。外灯のオレンジ色に照らされたブルーのランドセルは、鮮やかな夕焼け空みたかった。

「朔くん！」

叫ぶと、朔くんは足を止めて、わたしを見た。次に何を言えいいのかわからなくて、悪あがきをするように、わたしは朔くんのもとに走った。

水たまりに思い切り足をつっこんでしまつて、ふくらはぎのあたりで冷たい水が弾けた。

でも、その冷たさで、目が覚めた気がする。

「いっぱい聴いてもらおうよ、夏祭りだ」

朔くんに向かって身を乗り出し、喉を大きく広げて言った。

「どうせ消えちゃう声だから大勢の人に聴かせたくないって気持ちと、消える前にみんなに聴いてほしいっていう気持ち、正反対だけど、裏と表でちゃんとながつてるんだと思うよ。だから、どっちも持つていいんだよ」

今日、保健室で南先生に言われたこと。さつき亜矢さんに言われたこと。内容はちがうけれど、それぞれの話の欠片が集まつて、わたしの中で言葉になる。

ああ、そっか。自分の言葉つて、こうやって増えていくんだ。友だちを増やすみたいに、出会った言葉の数だけ、わたしの言葉が増えていく。

「だから、夏祭りでいろんな人に朔くんの歌を聴いてもらおうよ。朔くんの寂しさを、いろんな人と共有すればいいんだよ。声変わりがきちゃつても、朔くんのソプラノがきれいだった事実は消えないんだから、みんなに覚えていてもらえばいい」

わたしだけじゃなくて、半地下合唱団のメンバーだけじゃなくて、夏祭りに来た大勢の人に。「もったいない」と思われるかもしれないけど、その裏には「柚原朔のボーイ・ソプラノは素晴らしかった」という事実が、まちががなく、あるのだから。

「『もったいない』って言葉は、残念って気持ちもあるけど、なくなっちゃったものを愛しいなつて思う気持ちの方が、大きいと思うんだ」

これは……そうだ、『あの素晴らしい愛をもう一度』の歌詞を見た奈津実さんが、こんな風に言っていたんだ。

「……それって、真子ちゃんも夏祭りのステージで一緒に歌うってこと？」

街灯のオレンジ色がとどかない暗がり、朔くんが笑ったのがわかった。ほほえんだのか、苦笑いだっただのか、薄暗くて今ひとつわからなかった。

「うう、それは……」

「まあ、どっちでもいいけどさ」

返答に困ったわたしを見て、朔くんは肩をすくめてみせた。

わたしの言葉が朔くんの中のどこに納まったのか、わたしからはわからない。ただ、朔くんの中にちゃんと入っていったのだけは、なんとなくわかった。

それだけで、充分だった。

「ありがとうね」

そう言って、朔くんはわたしにもう一度手を振って、路地を歩いていった。

(額賀滯『ラベンダーとソプラノ』による)

(注1) 朔ちゃん……ここでは朔が自分のことを「朔ちゃん」と呼んでいる。

(注2) バー……「半地下合唱団」が練習をしているお店のこと。

問一 ― 線①「この歌の背景をもっと知りたいな」とありますが、ここには真子のどのような思いが表れていますか。最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 朔の美しい歌声にこめられた観客へのメッセージを理解したいという思い。
- イ 朔の美しい歌声がどのような技術に支えられているのかを理解したいという思い。
- ウ 朔の美しい歌声にこめられていた曲の物語や成り立ちを知りたいという思い。
- エ 朔の美しい歌声が生み出すメロディーの複雑さをもっと知りたいという思い。
- オ 朔の美しい歌声を支えてくれている家族のことをもっと知りたいという思い。

問二 ― 線②「力強く、澄んだ風に物語や想いがとけると、ラベンダーみたいな優しい香りがする」とありますが、これを説明したものとして最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 誰も失敗をしないように皆で心を一つにすることで、鍛え上げられた歌声が美しく調和して元気のよい合唱が生まれるということ。
- イ 歌の技術を磨き上げた一人ひとりが、豊かな個性を發揮することで、楽曲の持つ意外なよさが引き立って面白い合唱が生まれるということ。
- ウ 作者が歌に込めたメッセージをメロディーに乗せると、思わず眠気に襲われてしまうほど心が穏やかになるような合唱が生まれるということ。
- エ 歌のもつメッセージを理解して、気持ちを歌声に乗せながらよいハーモニーをつくり上げることができたとき、心地よい合唱が生まれるということ。
- オ 作者の意図を理解した上で、家族の愛情を美しい旋律に乗せて歌うと、思いやりにあふれる温かな合唱が生まれるということ。

問三 〜〜線㉞「見すえた」・〜〜線㉟「むなしい」の本文中の意味として、最も適切なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

㉞ 「見すえた」

- ア ふいにながめた
イ じっと見つめた
ウ そつとにらみつけた
エ すつとあおぎ見た
オ ぐつとのぞきこんだ

㉟ 「むなしい」

- ア こだわりのない
イ 心苦しい
ウ 腹立たしい
エ 意味がない
オ もったいない

問四 —— 線③ 「ぼつりとこぼした朔くんが、のどにそっと手をやる」とありますが、ここには朔のどのような気持ちが表れていますか。最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 自分のソプラノの声はかけがえのない大切なものであるため、学校の合唱団に所属してのどを使いすぎてしまうことのないように守りたいという気持ち。

イ ソプラノの声を出すにはのどに負担がかかるものの、よりよい歌声を求めて何度も練習をしまい自分の声を傷つけてしまうことをやるせなく思う気持ち。

ウ 朔の中では自分の歌声に納得がいていないものの、ソプラノの高い音域を出せるだけで合唱団の人たちから重宝される現状にいらだつ気持ち。

エ 朔は純粹じゆんすいに歌うことを楽しんでるのに、周囲の人々はソプラノのもの珍めづしさを素晴らしいとほめるばかりで、自分の歌声を快く思えない気持ち。

オ 自分の持つ伸びやかなソプラノの声は成長と共に確実に失われるとわかっているものの、自分にとっては本当に特別なもので愛着を捨てきれない気持ち。

問五 —— 線④ 「大人っぽい雰囲気の子だなと思っていた」とありますが、朔が「大人っぽい雰囲気」を身につけた理由を、真子はどのように考えていますか。本文中からその理由になる部分を三十字以内でさがして、「くから」につながる形ではじめと終わりの三字をぬき出して答えなさい。

問六 —— 線①～⑤の表現について説明したものととして、適切でないものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア —— 線① 「雨上がり独特の蒸し暑さと、ねっとりとした水たまりの香り」は、朔に何もしてあげられないことに対して、真子がかもかもとした思いを抱えている様子を感ぜさせる。

イ —— 線② 「外灯のオレンジ色に照らされたブルーのランドセルは、鮮やかな夕焼け空みたいだった」という表現は、遠ざかる朔から目を離せないという真子の様子を感ぜさせる。

ウ —— 線③ 「冷たさで、目が覚めた」は、肌にはじけた水の冷たい感触を通して、朔に伝えたかった言葉の糸口をようやく見つけられた真子の様子を表している。

エ —— 線④ 「喉を大きく広げて言った」は、真子が全身を使って、自分が本当に思っていることを一生懸命に伝えようとする様子を表している。

オ —— 線⑤ 「街灯のオレンジ色がとどかない暗がり」という表現は、朔のもつ心の闇には自分の言葉が決して届かないことを、真子が残念に思う様子を表している。

問七 —— 線⑤ 「友だちを増やすみたいに、出会った言葉の数だけ、わたしの言葉が増えていく」とありますが、どのようなことですか。説明しなさい。

問八 —— 線⑥「わたしの言葉」とありますが、真子は朔にどのようなことを伝えようと思いましたか。適切でないものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 歌声を皆に聞いてもらうことで、朔も自分の気持ちを誰かとわかち合うことができるのだということ。
- イ 朔の歌声はデータに記録しておけば永遠に残り続けるため、自分の手元にあることと同じだということ。
- ウ 歌声の消える悲しみと特別な歌声を大切に思う気持ちは、どちらも持つていてよいのだということ。
- エ 朔のボーイ・ソプラノはとびきり美しかったという事実は、歌声のなくなった後も消えないということ。
- オ ボーイ・ソプラノへの愛着とそれを失う悲しみを抱えている朔の気持ちを、自分も理解できたということ。

問九 —— 線⑦「ありがとうね」とありますが、もし朔がこれに続けて真子に言葉をかけるとしたら、どのような言葉になると思いますか。想像して台詞せりふの形で答えなさい。

〔三〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

注意。、「」などは一字に数えます。

言葉を書くのは「おもい」を表現するためで、記された言葉を読むのは「おもい」を受けとめるため、こう考えることができる。でも、「おもい」とはいつたいたいなんだろう。ぼくたちは自分が何を「おもって」いるのか、ほんとうによく理解しているのだろうか。

「おもい」とひらがなで書いた。今度はこの文字を漢字にしてみる。すると「おもい」と一言でいっても、異なる「おもい」があることに気が付く。これまで人はさまざまな文字を「おもう」と読んできた。

思う (I) — 頭で考える

意う (注意) — 意思、あるいは意志をもって感じる

憶う (記憶) — 過去を今によみがえらせる

想う (II) — 見えないものを感じる

付う (付度) — 相手の心を推し量る

懐う (懐古) — 懐かしむ

顧う (回顧) — 過去を顧みる

恋う (恋愛) — 何かを恋する

惟う (思惟) — 人間を超えた存在をおもう

念う (祈念) — 言葉にならないおもいを宿す

君が持っている辞書に載っていないものもあるかもしれない。でも、これらはみんな「おもう」という言葉だ。それぞれがどんなことを意味しているのかは、括弧のなかの熟語を読めばいっそうよく分かる。

ここに挙げた十の「おもい」は、ばらばらに存在しているのではない。いつも ^⑥分がちがたく一つの「おもい」としてぼく

たちのこころのなかにある。

それぞれの「おもい」を別な色だと考えると感じやすいかもしれない。色合いに差はあっても、誰の心中にも「思い」だけでなく、「恋い」も「念い」もある。でも、あまりに日常に忙殺(注1)されていると、「念い」の存在には気が付けない。

もう君は、「おもいを言葉にする」とは、いえない。でも、そもそも「おもい」は、^①記号としての言葉という器を超えているのではないだろうか。

でも、「おもい」はいつも何らかの器を求めてくる。記号としての言葉からあふれでももの、それらをすべて引き受けるのが、^②意味としてのコトバだ。

詩人や歌人たちは、このコトバのはたらきに気が付き、詩や歌を世に送り出している。目に映る文字は、目には見えない意味の世界への扉に過ぎない。

真に「読む」という行為が実現するとき、ぼくたちは A という舟に乗って B の世界へと旅をすることになる。

言葉ではけっして読むことができない文章に出会うこと、それが読書のもっとも豊かな、そしてもっとも大切な経験かもしれない。

君は、石牟礼道子（一九二七～二〇一八）という名前を聞いたことがあるだろうか。作家でも詩人でもあった。彼女の作品としては、水俣病の患者とその家族の嘆きと叫びを言葉にした『苦海浄土 わが水俣病』が、もっともよく知られている。

^③水俣病は、いわゆる「病」ではない。そもそも「水俣病」という表現自体が、この出来事の真実を隠蔽(注2)しているともいえる。「水俣病」は、明らかな人災だからだ。

チッソという会社が、十年をはるかに超える歳月、有害であることを知りつつ、有機水銀を含んだ工場排水の放出を続け、それが海に流れ込み、そこに生きている生き物、魚や海老、蟹などに蓄積され、それを日常的に——それも多く——食していた漁民たちの身体を蝕んだ。

水俣病は、神経を侵す。身体が奪われるだけでなく、語ることでできなくなった人も少なくなかった。これまでいったい何人の人が水俣病に巻き込まれたのかは、今でも分からない。国が認めたのは二千数百人だが、この数字は、事実とは

大きくかけ離れていて、現状を理解する上では何の役にも立たない。

訴訟が起こつても、国や企業は、被害者の数をなるべく少なくしようとする。そこに民衆と企業、地方自治体、国との終りのない「たたかい」が始まった。

終わりが無い、というのは、いつさいの解決を拒む、ということではない。何も語らないで亡くなった人がいる以上、残されたぼくたちは、それをどんな形であれ「終わり」にすることは許されていない。

ここでいう「たたかい」というのは、必ずしも衝突を意味しない。二度と同じ過ちを犯すまいとする人間の欲望との「たたかい」にほかならない。

ある時期、科学の進歩、そして経済の発展に重きを置いた日本は、「いのち」の意味を見失った。「いのち」の重み、「いのち」の手応え、「いのち」の交わりが、ぼくたちの日常生活を根底から支えていることを忘れた。

チツソが、猛毒だと分かっている、有機水銀を海に続く川に排出したのは、その先に経済的な利益があったからで、それを実行した人々にとっては、自社の利益は、ある人々の「いのち」に勝るものとして認識された。

『苦海浄土』には、こうした近代の闇、人間の愚かさ、そして、苦しむ者の嘆きがありありと描き出されている。だが、もし、この作品が糾弾の文学に終わるものだとしたら、ここまで長く読み継がれることはなかったかもしれない。

それでもなお人々が、直視するのがためらわれるほどの悲惨な現実を受け止めながら、この本を読むのは、身体的自由を奪われた人々が発する無言の「C」に打たれるからだ。そこには、容易に言語化されることを拒むような「いのち」の訴えがある。

この本を、はじめて手にしたのは十六歳のときだった。でも、一応、読み終えることができたのは四十三歳のときだった。「一応」と書いたのは、それはどうにかページをめくり終えたというだけで、ほんとうの意味でこの本を「読み終える」ことではないように思うからだ。読むたびにこの作品が開いてくれる「意味」の世界はどんどん深く、広くなっていく。

分かったことよりも、分かり得ないことの方が鮮明になっていく。でも、分からない、そう感じるたびに、ここに刻まれた言葉は、ぼくの心に強く寄り添うようにも感じられる。彼女に「いまわの花」と題するエッセイがある。さくらの花と水俣病患者をめぐる一文だ。

そこには次のような一節がある。

……桜の時期になると、いつもそれを語らずにはいなかった母親も、娘と同じ病いで、去年の夏に死亡した。まだ原因も究明されぬ時期に(注5)みまかった娘は、八つばかりであった。村中の異変と、娘の病状に放心している母親の耳に、まわらなくなってしまうた口でいう娘の声が、ふとどいた。極端な「(注6)構語障害」のため、ききとりにくかったが、母親だけにききとれる言い方で、その子は縁側(えんがわ)にいざり出て、首をもたげ、唇(くちびる)を動かした。

なあ かかしゃん

かかしゃん

しゃくらははなの 咲いとるよう

美しさよ なあ

なあ しゃくらははなの

いつくしさよう

なあ かかしゃん

しゃくらの はなの

(『花をたてまつる』石牟礼道子)

この女の子は、溝口(みぞぐち)とよ子という。「なあ かかしゃん」にはじまる、ここに八行で記された、さくらをめぐる、(注5)これはど荘厳な詩をほくはほかに知らない。このとき、八歳だったとよ子は、おそらく詩を書いたことなどなかった。だが、石牟礼は、彼女のなかに永遠の詩人の誕生を見過(たんじょう)ごさない。

今、ぼくたちが目にしているのは、石牟礼道子の文章だが、彼女自身の言葉というより、彼女に託(たく)された言葉だ。誰も詩を生み出したなどと感じていないところに生まれた、(注6)けっして朽ちることのない詩情だ。

書く人に託(たく)されているのは、誰も書かないような言葉を書き記すことだけではない。多くの人が見過(みか)ごして顧みない日常のなかに、意味の宝珠(ほうじゆ)を見つけることでもある。

(若松英輔『読み終わらない本』による)

- (注1) 忙殺……非常に忙しいこと。
- (注2) 隠蔽……真実をおおいかくすこと。
- (注3) 糾弾……罪状や責任をとがめること。
- (注4) いまわ……死に際ぎわ。もはやこれまで、という状態。
- (注5) みまかった……この世を去ったこと。
- (注6) 構語障害……声は出るが、はつきりと発音ができない障害のこと。
- (注7) 宝珠……宝とすべき珠たま。宝物のこと。

問一

I

II

に当てはまる最も適切な二字熟語を、それぞれ考えて書きなさい。

問二

~~~~線㉞「分がちがたく」・~~~~線㉟「蝕んだ」の意味として、最も適切なものを次の中から選んで、それぞれ記号で

答えなさい。

㉞ 「分がちがたく」

- ア 関わり合うことなく
- イ 理解しきれないまま
- ウ 全く共感できずに
- エ 密接にむすびついて
- オ 細かく分かれて

㉟ 「蝕んだ」

- ア 癒<sup>い</sup>して楽にした
- イ じわじわ痛めつけた
- ウ ゆっくり養った
- エ 一気に攻撃<sup>こうげき</sup>した
- オ ないがしろにした

問三 — 線①「記号としての言葉」・線②「意味としてのコトバ」に当てはまるものとして、最も適切なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア 「+」や「-」など数式を書き表すために用いられるもの。

イ 絵文字や顔文字のように感情を表すもの。

ウ 書かれた言葉を文字通りに認識にんしきしたもの。

エ 文字で伝えられないものを直接口で伝えるもの。

オ 漢字ではなく、カタカナやひらがなで書かれたもの。

カ 言葉で表しきれない「おもい」を伝える力をもつもの。

問四

A

く

C

には「言葉」と「コトバ」のどちらが入りますか。それぞれ適切なものを書きなさい。

問五

— 線③「水俣病は、いわゆる『病』ではない」とありますが、筆者は「病」ではなくて何だと考えていますか。本文中からぬき出して答えなさい。

問六

— 線④「近代の闇、人間の愚かさ」とありますが、筆者はどのようなことを「闇」や「愚かさ」と言っているのですか。「いのち」という言葉を用いて説明しなさい。

問七 — 線⑤ 「これほど荘厳な詩をほくはほかに知らない」とありますが、なぜ筆者はそうに思うのですか。次の中から適切なものを二つ選んで、記号で答えなさい。

ア 水俣病によって身体の自由を奪われたとよ子が、過酷かこくな現実げんじつに打ちのめされている母親に対して、さくらの花の美しさを訴える懸命けんめいさが伝わってくるから。

イ とよ子が構語障害をもちながらもわずか八歳にして人々を感動させる詩を発表したことで、この詩のもつ価値が増し、威厳いげんが備わったから。

ウ いままで詩を書いたことのなかったとよ子が、文学者である石牟礼道子に見出だされるほどの優れた詩人であったことを知り、この詩が立派なものであると思っただから。

エ 同じ病におかされていながらも、とよ子とその母親がさくらの花の美しさをたたえ合った様子を描いた詩が、筆者を圧倒あつぱくするものであったから。

オ さくらの美しさを歌う詩は世の中にたくさんあるけれども、筆者はこれほど多くの表現技法を用いて人々の心をつかもうとしたさくらの詩をほかに知らなかったから。

カ わずか八歳のとよ子が発した、さくらの花の美しさを伝えようとする言葉から、「いのち」へのいつくしみを読み取ることができるから。

問八 — 線⑥ 「けっして朽ちることのない詩情」について次の問いに答えなさい。

(1) 「朽ちることのない」と同じ意味の言葉を、本文中から漢字二字でぬき出して答えなさい。



(2) とよ子の詩はなぜ「朽ちることのない」ものだといえるのですか。最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 構語障害をもった人の作った詩は珍しく、詩から伝わってくる並々ならぬおもいが読者の心を打つから。
- イ おもいを受け取った母親の中にとよ子の嘆きを受け継がれ、国や企業に責任を求め続けるきっかけとなったから。
- ウ とよ子のことは、時代や環境が異なる人々にも、しみじみといとおしさや悲しみを届け続けるものだから。
- エ ひとつの詩が本にまとめられて初めて、当時の悲惨な状況が時代を超えて世の中に残されることになったから。
- オ さくらの花の美しさはいつの時代も変わらず、詩の中で人々に読み継がれて決して色あせることがないから。



